

急性期医療を中心とした地域医療の要として、感染対策はICTを中心に常に意識して取り組んでいます

救命救急センター 根岸 正敏 先生



Q 近森病院の特徴を教えてください

A. 救命救急センターを中心とした地域の急性期医療が柱です

当院は急性期医療を中心に、高知県の地域医療に携わっています。救命救急センター（ER）では県のドクターヘリの受け入れも多く、搬送されてくる患者さんも外傷、心血管系、脳疾患、ショックなどやはり重症例が多くなります。ERでの初期治療が落ち着いたなら、患者さんの全身状態、重症度に応じてICU、救命救急病棟、SCUや各診療科にバトンを渡して次の患者さんの受け入れに備えます。一方で、walk inで来院される軽症の患者さんも含め、基本的には断りません。「患者さんが困った時の救急」ですから、可能な限り患者さんを受け入れられる体制でいたいと考えています。



Q ERでは超音波をどんな時に使っていますか？

A. 外傷・心疾患などの重症例から血管ライン確保、軽症例まで幅広く使っています

まず重症例からいくと外傷、急性冠症候群（ACS）、ショックなどが主です。外傷に対するFAST（focused assessment with sonography for trauma）は最近では当たり前になってきていますし、ショックの場合は心臓や下大静脈だけでなく下肢静脈までみる場合もありますので、用途に応じたタイプのプローブを使い分けます。ただ、緊急で大抵は時間がかけられないので1本のプローブで診てしまうことも多いです。

診断がついてからは超音波ガイド下での血管確保に使用します。最近ではCVラインだけでなく末梢血管にも使うことが多いです。軽症例でも皮下膿瘍などを穿刺・切開する時に使うことがあります。



Q 感染対策はどのような取り組みをしているのでしょうか？

A. ICT（感染制御チーム）のリードで、病院全体で数値化して緊張感を持って取り組んでいます

感染対策については、合同運営会議やICT（感染制御チーム）から指摘が入ることがあります。ICTラウンドは毎週1回の定期ラウンドと、月に1回、部署をランダムに回る不定期ラウンドがあります。感染陽性率やコンタミ率など、部門ごとにICTがチェックしてくれています。ときには「先月、ER成績悪いよ！」なんて言われてしまうこともあり、いい意味での緊張感があります。そうした活動が新型コロナウイルス感染症流行以前からあり、感染やその対策に関する意識は病院全体で高いと思います。



救命救急センターにtrophon2が導入されました！

根岸先生と野瀬看護師長に導入の経緯や活用状況について伺いました



プローブってやっぱり汚れてますよね

根岸先生： 外傷などに使用した後のプローブはやはり血液がついている時があります。CVラインを取る際の清潔操作では滅菌プローブカバーをしています。FASTを行うときにはカバーはしていません。基本的には超音波を使用した医師が不織布ガーゼや消毒薬含浸のウェットタイプのもので拭き取っていますが、完璧に行うのは難しいです。実際、看護師さんも「プローブ汚れてるな」、「きれいに拭けてないな」って思っていましたよね？

野瀬師長： やっぱり、ただ拭いただけのプローブを次の患者さんに使うことについては気になっていました。でも、わたしたちも「どうしたらいいんだろう？」、「どうする方法があるんだろう？」と、動けずにいた部分もありますね。



「trophon2、いいんじゃない？」スムーズに導入が決まりました

根岸先生： trophon2の提案があったとき、僕は「あ、いいんじゃないの？」ってすぐ思いましたけど。看護師さんの的にはどうでしたか？

野瀬師長： 看護師サイドでも「いいんじゃないですか？導入できるならしまししょうよ」という声があった、とくに反対や抵抗もなく割とスムーズに決まったと思います。やはり、交差感染リスクのある汚れたままのプローブを使うことに対して患者さんに申し訳ないという気持ちがあり、自分が患者側になったつもりで考えると「安全なプローブを使ってほしい」と思いますから。



消毒済みのものを使えるのはありがたいし、安心感がありますね

根岸先生： trophon2の導入後、プローブの消毒は夜勤帯の落ち着いた時間に看護師と救急救命士がやってくれています。また、日中でも明らかに感染が疑われる患者さんへの使用後にはトロフォン2で消毒しています。「消毒済み」と分かるようにカバーをかけてくれているのですが、プローブ使用後に血がついていた記憶があったりすると、消毒済みのものを使えるのはありがたいと感じるようになりました。安心感がありますね。

野瀬師長： 聴診器などディスポ化できるものは患者間を跨いで使用しないようになりましたが、プローブは再利用しますのでより清潔を意識しないといけない機器だと改めて感じますね。昼夜ともに救急患者さんの受け入れや緊急処置の対応などで忙しい環境にありますが、ずっと装置の前にいる必要が無いので、他の仕事をしながらできています。いまではプローブの消毒が当たり前になりました。患者さん、スタッフの安全を守るために活用していきたいですね。

📌 ここがポイント！

1. プローブの拭き取りだけでは感染対策は不十分
2. プローブの消毒は業務や患者の落ち着いた夜間帯に実施
3. trophon2の操作は看護師、救急救命士が分担して実施



社会医療法人近森会 近森病院
高知市大川筋一丁目1-16

販売名: trophon2(トロフォン2) / 管理医療機器 特定保守管理医療機器 一般的名称: 超音波診断用プローブ用洗浄消毒器 医療機器承認番号: 30100BZ100002000



Nanosonics Limited
(製造者)
7-11 Talavera Road, Macquarie Park
NSW 2113 Australia
www.nanosonics.com.au



JTP株式会社
(選任製造販売業者)
東京都港区三田3-13-12 三田MTビル4階
☎ 03 (6772) 8088
FAX 03 (6685) 6544



ナノソニックスジャパン株式会社
(販売者)
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-27-3 やまとビル8F
☎ カスタマーサポートセンター 03 (6772) 8080
✉ info@nanosonics.jp
www.nanosonics.jp